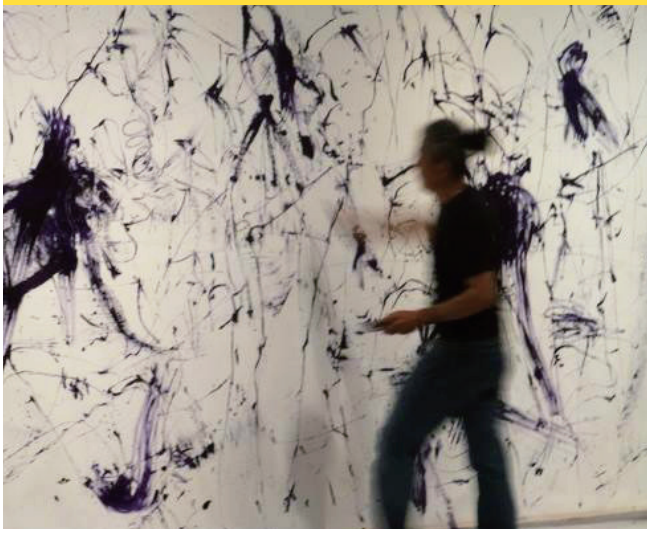
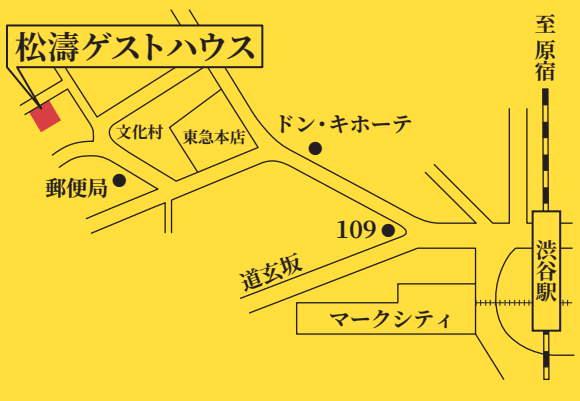
アート・ジャム in 世田谷 関連企画

主催 特定非営利活動法人 文化交流機構「円座」

中所宜夫 能楽らいぶ 「光の素足」×中津川浩章 ライブペインティング





日時 2021年 9月25日（土）

開場 13:00　開演 14:00（終演予定 16:00）

会場 松濤ゲストハウス
〒150-0046 東京都渋谷区松濤 1-9-23

入場料 3,500円 ※お問い合わせは裏面をご確認下さい。

能楽らいぶ「光の素足」× ライブペインティング

能には謡の節、舞の型があり、表現に制約があるように思われています。しかしその制約そのものが、人と宇宙の根っこに直接つながっているように、私は感じます。
アートにも多くの方法がありますが、単色の絵の具による線描のみで無限の表現に挑む中津川氏の方法は、能に近いものがあります。
能「光の素足」は宮澤賢治の世界を能で表現したものです。中津川氏は障碍者アートをファシリテート（導き、引き出す）していますが、この能楽らいぶは賢治さんが二人の創作をファシリテートする場となりそうです。

■ 能「光の素足」

少年一郎が山中でひとり剣舞（けんばい）を舞っていると、年老いた山人が突然現れて声をかけます。山人は少年の孤独の翳りに光を当てて行きます。助けを求める少年に、自分の力で乗り越えなければならないと説いた山人は、その夜の再会を約束して姿を消します。（中入）少年一郎は支度を整えて夜の山に向います。銀河の流れる美しい夏の空に流れ星があるかと見るまに、遥か彼方から金色の光が満ちて光の素足が現れます。少年は光の素足から言葉を受け取り、やがて元の丘の上に目を覚まします。銀河が美しい静かな夜でした。

能楽らいぶ「光の素足」について

周りに受け入れられないとか、未来に希望が見えないとか、現在はとりわけ若い人の苦しみが増しているように思います。自分もそういう苦しい思いをしながら、でも世界や人間は素晴らしいのだ、どんな人にも輝きがあるのだと、「世界が全体幸福に」なることを夢見た人がいました。100 年前に東北に生きた宮澤賢治です。能は 650 年くらい前に世阿弥が始めた芸能ですが、自然の営みの中で生きる人間の力や波動の確かさを、とても良く伝えてくれます。賢治の言葉の力を世阿弥の方法で表現してみたのがこの作品です。

中所 宜夫（なかしょ のぶお）能楽師。シテ方観世流。観世九皐会所属。特別無形文化財総合指定保持者。1958 年愛知県生まれ。一橋大学在学中より能楽に志し、観世喜之師の内弟子となる。1988 年独立。以降、観世九皐会所属能楽師として数々の演能活動を行い、2018 年には老女物の「卒都婆小町」を初演する。また、能楽堂を離れた小規模公演「能楽らいぶ」では、他分野との共演や新しい作品の創作などを展開し、その活動の中から宮澤賢治の世界を能舞台に再現する能『光の素足』を生み出す。

らいぶとライブの交わる瞬間

ライブペイントを始めたのはまだまだ震災の傷が人にも街にも深く濃い影をおとしていた阪神淡路大震災の３か月後。神戸市灘区にあるギャラリーでの個展の時だった。人が汗をかき、全身で表現する、同じ空気を呼吸する、この場所でまさに今生まれつつある絵画。何かが届いたと感じた瞬間だった。今回は友人でもある能楽師の中所宜夫氏とのコラボレーション。能の内にある呪術的な感覚と描くことの原始の感覚が絡まって何が生まれるのか。一期一会の世界を目撃してほしい。

中津川 浩章（なかつがわ ひろあき）

画家、美術家、アートディレクター。記憶・痕跡・欠損をテーマに自ら多くの作品を制作し国内外で個展やライブペインティングを行う一方、アートディレクターとして障害者のためのアートスタジオディレクションや展覧会の企画・プロデュース、キュレーション、ワークショップを手がける福祉、教育、医療と多様な分野で社会とアートの関係性を問い直す活動に取り組む。

2021 年 9 月 25 日（土）　入場料：3,500 円

振込先口座名：特定非営利活動法人文化交流機構「円座」
ゆうちょ銀行 10150 - 50111761 ／ 他金融機関からは、銀行名：ゆうちょ 店番：018 普通 5011176

お申し込み・お問合せ

NPO 文化交流機構「円座」TEL＆FAX 03-6321-3424 / enza@wave.dti2.ne.jp
中所宜夫 能の会 nakashonobuo@nohnokai.com
中津川 浩章 nakatsugawa55@hotmail.com